



〈翻訳〉エミール・ゾラ『わがサロン（一八六六年）』（上）

吉田，典子(訳)

(Citation)

近代, 113:73-106

(Issue Date)

2015-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81009220>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009220>



わがサロン（一八六六年）（上）¹

エミール・ゾラ
吉田典子 訳

ある自殺²

一八六六年四月十九日

親愛なるヴィルメッサン氏³、貴殿は私に、今年のサロンに関して、『エヴェヌマン』紙⁴の読者諸氏にわが国の画家たちについて語ること依頼して下さいました⁵。責任の重い仕事ですが、喜んでお引き受けいたします。私は重大で恐るべき真実を述べる決心をしていますので、おそらく不満を抱く人々がたくさん出てくるでしょう。しかし私は、心に積み重なった怒りを全部吐き出すことに、心底からの快感を覚えるでしょう。

貴殿は、「どうか遠慮しないで下さい」とおっしゃって下さいました。したがって私は、臆することなく、真の権威ある人間として語ろうと思います。数日後に控えたサロン開幕の前に、私の信条表明と、芸術の現在についての手短な研究をお届けするつもりです⁶。

今日は、ひとつの悲しい使命を自分に課しました。ここで、数日前にピストルで頭を撃ち抜いたある画家⁷のことを話す責務があると考えたのです。彼のことはおそらく、私の同業者のだれ一人として関わりを持たうとしないでしょう。

ある画家が、審査委員会に作品を拒絶された直後に自殺したという噂が流れていました。私はその不幸な男が自殺したアトリエを見たいと思いました。通りと番地を何とか突きとめ、今しがたその不吉な部屋から出てきたところです。部屋の床にはまだ、いくつかの大きな赤っぽい斑点⁸が残っています。

読者諸氏に、この部屋の内部に入ってもらうのがよいとお考えにはなりませんか？ 私は自分の仕事の突端から、ひとつの墓標に打ち当たったのだと考えると、一種の苦い喜びを覚えます。群衆の喝采を受けるであろう画家たち、その作品が明るい光の中に展示されるであろう画家たちのことを考えると同時に、私は孤独なアトリエで別れの言葉を書き、一晩中死の準備をして過ごしたこの哀れな画家の姿を思い浮かべるのです。

断じて感傷に訴えようとしていたわけではありません。私は深い心の動揺とともにその部屋のドアをノックしました。ドアを開けてくれた女性は、自殺した男の女中だったようですが、彼女に質問したとき、私の声は震えていました。アトリエは小さく、かなり豪華に装飾されています。入って右側には、幅の広いオーク材でできた食器棚があります。隅の方には、羽目板と引き出しのついた筆筒のような、やはりオーク材でできた別の家具類が置かれています。警察の封印、二つの赤い封蠟で留められた紐が、これらの家具のひとつひとつに施されています。死が突如としてここを通り過ぎたことがわかります。

右側にはとても狭い長椅子のような、低く押しつぶされたベッドが横たわっています。彼が発見されたのはそこでした。頭はだらりと下がって碎けており、まるで眠っているようでした。

ピストルは彼の手から落ちてはいませんでした。

私は彼の名前すら知りませんでした。彼に才能があったのかどうかも知りませんでしたし、今でもわかりません。私には、戦いに疲れ果てて逝ってしまったこの男を判断することはできません。壁に掛けられた彼の絵を四〜五枚見ましたが、判定者の目で見たわけではありません。サロン評では私は手厳しく、暴力的ですらあるでしょう。しかしここでは、私は好意的で感情的にしかありません。

その画家はドイツ出身で、作品にはその出自が感じられます。シャルル・コント氏のようなジャンルの作品で、中世に題材を取った歴史画です。画架の上には、鉛筆で完全に決定された下図のある白いカンヴァスがありました。それがおそらく絶筆となった作品でしょう。画家はこの未完成の絵の前で自殺したのです。

なるほど、私には審査委員会の拒絶だけが、この不幸な男の死を決定したと断言するつもりはありません。自殺というこの至高の瞬間における人間の魂の中に降りていくことは困難です。いくつもの苦渋がゆつくりと堆積されていき、あるとき、そのひとつが死に至らしめるのです。

しかし、この画家は温厚な性格で、何ひとつ悩みはなかったと聞きました。彼にはいくらかの財産があり、心配なく仕事ができる状況でした。

本当に、私はこの男に死刑を宣告したとは思いたくはありません。もし私が画家で、同業の仲間たちをサロンの外に追い出すという榮譽を持ったとしたら¹⁰、今夜は悪夢にうなされることでしょう。私は自殺者のことを思い、おそらく自分も彼の死に責任があるのだと思い、いずれにせよ、たとえその画家に何らかの人知れぬ悩みがあったとしても、もし自分が寛大であれば、おそらくこのような不幸な結末を妨げることができただろうという考えに苛まれるでしょう。

貴殿はおそらく、私がこうしたことすべてから、ひとつの教訓を引き出すことを望んでおられるでしょう。しかし、今日はその教訓を書くことはしません。なぜなら、それは私が『エヴェヌマン』のために準備している記事と重複することになるからです。

私はただ、読者諸氏にひとつの事実をお伝えするために、この手紙を書きました。私は今年審査をした審査委員会に対する起訴状を、可能な限り膨らませるつもりです。

さあ、審査委員会に対して手厳しい訴訟を起こさねばなりません。

クロード¹¹

「一八六六年四月二四日」

ヴィルメッサン氏と私は、私がここでペンネームを使ってサロン評を書くことで合意していた。私はすでに、別のほぼ毎日の記事に署名をしているので¹²、同じ新聞の中に自分の署名が二度現れない方がいいと思ったのである。

私は仮面をしつかりとかぶるよりも前に、それを脱がざるを得なくなった。市場にマルタンという名前のロバがたくさんいるように、世間には美術批評を書くクロードなる人物がたくさんいるようだ。本物のクロードたちは、「ある自殺」という私の記事のことで、巻き添えになつて身を危うくすることを恐れた。それで彼らは皆、世論の前で審査委員会を相手に訴訟を起こすという大胆な考えを抱いているのは自分ではないことを読者諸氏に知らせるために手紙を書いてくるのである。

どうか安心されたい。革命的なクロードは私に他ならないことを公に発表することが決定された。クロード一族はほっとしたことだろう。

エミール・ゾラ

「序文」わが友ポール・セザンヌへ

13

友よ、僕は君と差し向かいで話すことに深い喜びを覚える。僕が今回群衆と、見ず知らずの人々とやり合ったばかりの争いのあいだ、どれほど苦しんだか君にはわからないだろう。僕はあまりに自分が理解されていないと感じ、身の回りにあまりに激しい憎悪を察知したので、落胆のあまりしばしば手からペンを落としたほどだ。

今日僕は、親密な悦楽を自分に与えることができる。それは、僕らが十年前から共にしている心地よいおしゃべりという悦楽だ。僕がこれらの数ページを書くのは君だけのためだ。僕にはわかつて、君は心でこれを読んでくれるだろうし、明日はもっと優しく僕を愛してくれるだろうと。

僕らはどこか人気がない場所において、いかなる戦いからも離れ、二人きりしていると想像してみてくれたまえ。そして、心の底までわかり合い、ただの一瞥で互いに理解し合える古くからの友人としておしゃべりをしていると考えてほしい。

十年前から僕らは芸術や文学の話をしている。僕らはよく一緒に過ごしたものだ、——覚えているかい？——

——そして、過去を掘り返したり、現在に問いかけたり、真実を見いだし、絶対に間違いない完璧な宗教を自分た

ちのために創ろうとしたりして、議論が続けている間に、夜が明けて驚いたこともよくあった。僕らは思想の恐ろしいほどの山々を揺り動かし、すべてのシステムを検討しては退けた。そしてこのじつに骨の折れる仕事の後で、僕らは力強く個性的な人生の外には偽りと愚かさしかないと考えた。

思い出を持っている人々は幸いだ！ 僕は人生において君のことを、ミュッセの言う、あの青ざめた若者のように見ている。君は僕の青春のすべてだ。僕の喜びのひとつひとつ、僕の苦しみのひとつひとつに君が関わっているのを見いだす。僕らの精神は、その兄弟愛の中で、肩を並べて成長した。今日、デビューの日において、僕らは自分たちを信じている。なぜなら僕らは、心も体も深く理解したからだ。

僕らは、ひっそりと孤立して、あまり人々と交わらず、好んで自分たちの思考の中で生きてきた。愛想がよく軽薄な群衆の中では、迷子になったように感じていた。僕らはあらゆるものの中に人間を探し、絵画であれ詩であれ、作品のひとつひとつに個人的な調子を見つけ出そうと欲した。巨匠や天才と呼ばれる人々は、各人が完全にひとつの世界を創り上げた創造者であると認め、弟子たちや無能者たち、あちらこちらから独創性の欠片を盗んでくることを職業としている人々を拒絶した。

わかるかい？ 僕らは、そうとは知らずに革命家だったのだ。僕らが十年間ごく小声で言ってきたことを、僕は今しがた、大声で言うことができた。争いの噂は君のところまで届いているね？ そして、僕らの大切な思想がどんな素晴らしい歓迎を受けたかを見ただろう？ ああ！プロヴァンス地方のただ中で、おおらかな太陽の下で、健全に生きていた可哀想な少年たち。その太陽が、このような狂気とこのような悪意を温めていたとは！

というのも、—— おそらく君は知らないだろうが——僕は悪意ある人間だということになっているからだ。公衆はすでに、僕をシャラントンの精神病院に連れて行くために何ダースかの拘束衣を注文した。僕は自分の肉親や

友人しか称賛しない、愚かで意地悪な人間で、スキャンダルを求めている、というのだ。

友よ、気の毒な話だろう、じつに悲しいことだ。つまり歴史はつねに繰り返すということだろうか？ いつも他の人々と同じように話さなければならぬのか、さもなくば黙っているというのか？ 僕らの長い会話を覚えているかい？ 新しい真実はどんな小さなものでも、怒りや罵声を引き起こさずに出現することはできないと話していたね。今度は僕が口笛でやじられ、罵詈雑言を浴びせられる番だというわけだ。

君たち画家は、僕ら作家よりもっと苛立ちやすい。僕は凡庸な本や下らない本について率直な意見を述べたが、文学界はさほど腹を立てることなく、僕の判定を受け入れてくれた。しかし、芸術家たちはもっと柔らかな皮膚をしている。僕が彼らに指一本触れようものなら、彼らは痛いと呼び始める。反乱が起こった。何人かの気のいい若者たちが僕を哀れんでくれて、僕が引き寄せた憎悪を心配してくれた。彼らは僕がどこかの四つ辻で喉を掻き切られるのではないかと心配してくれていると思う。

しかし、僕は自分の意見をごく素朴に言っただけなのだ。ある知り合いの美術批評家が最近彼の三十万人の読者に向かって、ボードリ氏¹⁴は当代随一の画家だと断言したが、その批評家と比べれば僕などはるかに革命的ではなかったと思う。僕はこれまで一度たりともそんな恐ろしいことを言ったためしはない。一時は、僕はこの美術批評家が心配になり、このような熱の発作を罰するために、寢床で暗殺されるのではないかと身震いしたほどだ。しかし、彼は素晴らしく元気で過ごしているらしい。したがって、提供することのできるサービスというものがあ、また言うことのできない真理があるということらしい。

というわけで、キャンペーンは終わり、公衆にとっては私が敗北した。人々は拍手喝采し、あざ笑っているというわけだ。

僕は群衆から玩具を取り上げようとは思わなかったので、『わがサロン』を出版する。二週間後には騒ぎは収まり、もともと熱心だった連中にも、僕の記事の漠然とした記憶しか残らなくなるだろう。その時には、人々の心の中で、僕の滑稽さと不誠実さはさらに大きくなるだろう。『エヴェヌマン』紙の紙面は風にさらわれてどこかへ行ってしまう、記事はもはや嘲笑者たちの目に触れなくなってしまう。そして、僕が言ってもいないことを言ったことにされ、僕が決して書かなかった途方もない愚かな言葉が語られるだろう。そんなふうにはなつてほしくない。だから僕は、クロードのペンネームで『エヴェヌマン』に掲載した記事を一冊の本にするのだ。『わがサロン』はあるがままの状態、公衆自身がそうあるように望んだ状態のままで残ってほしい。

これらは、僕が完成させることのできなかった研究の、汚され、引き裂かれたページである。僕はこれらがあるがままの状態、分析と批評の断片として提示する。僕が読者に引き渡すのはひとつの作品ではなく、いわばある訴訟の証拠書類である。

友よ、歴史は素晴らしい。僕は絶対に、これらの紙片を無にしたくはない。それ自体としてはたいした価値はないが、これらはいわば、僕が公衆を試した試金石だった。僕らは今や、僕らの大切な思想がどれほど不人気かを知っている。それに、僕はもう一度自分の考えを披露することが嬉しい。僕は自分の考えを信じており、数年後には、僕が正しいとだれもが認めるようになるのはわかっている。後になって僕の考えが非難されるのではないかと恐れたりはしない。

エミール・ゾラ

一八六六年五月二十日

審査委員会

一八六六年四月二十七日

一八六六年のサロンは五月一日にならないと開幕しない。その日になって初めて、私が裁くべき人々に判断を下すことが許されることになる。

しかし、入選した画家たちについて裁くよりも前に、審査員たちを裁くのが適切だと私には思われる。ご存じのように、フランス人はたいへん慎重である。私たちは、正式に署名されかつ確認の署名もされたパスポートなしでは、一歩も前へ踏み出さない。そして、ある人間が公衆の前で、でんぐり返りをするのを許可するには、彼が権威ある人々によって、あらかじめ十分な取り調べを受けてからでなければならぬ。

要するに、芸術の自由な展示は、予想外で取り返しつかない不幸を引き起こす可能性があるため、聖域の入り口には警備隊が配置される。それは理想を守るための一種の入市税関のようなところで、荷物の調査を行い、神殿の中に持ち込まれようとするすべての密輸品を放逐する責務を負っている。

やや突飛と思われる喩えをお許しいただきたい。サロンというものが、毎年私たちに給仕される芸術の巨大なシチュー鍋だと想像してみてもいい。画家や彫刻家がそれぞれ自分の作品を送る。しかし、私たちの胃袋はデリケートなので、これら好みも見かけも多種多様な食べ物を調理するために、料理人の一団を任命する方が、間違いないだろうと思われた。人々は消化不良を恐れ、公衆の健康の番兵たちにこんなふうと言ったのである。

「ここに素晴らしい料理の材料があります。胡椒は控えめにして下さい。身体を興奮させますから。ワインには水を混ぜて下さい。大国フランスが、理性を失っては困りますから。」

それ以来、料理人たちが大きな役割を果たすようになったのだと私には思える。彼らが私たちに賛美するものの味付けをしてくれ、私たちが表明すべき意見を噛み砕いて教えてくれるのであるから、私たちには、大食漢のように質の悪い食べ物で腹一杯にしないように見張ってくれるこれらの親切な人々のことを、何よりもまず気にかける権利がある。あなたがビフテキを食べるとき、牛肉のことを気にかけるだろうか。それよりも、焼き加減がレアすぎたり、十分にレアでなかったりといったことで、料理人を褒めたりけなしたりすることしか考えないのではないだろうか。

したがってサロンは、紀元一八六六年におけるフランス芸術の完全無欠な表明ではなく、このデリケートな仕事のためにわざわざ任命された二人の料理人によって準備され煮込まれた一種のシチューに他ならないのである。

現代のサロンは、芸術家たちの作品ではなく、審査委員会の作品である。したがって私は、何よりもまず、審査委員会のことを問題にしたい。彼らこそが、臆病な凡庸さと不当に手に入れられた評判の数々が、むき出しの光の下で展示されている、寒くて青白いあの細長い部屋部屋の制作者なのである。

かつては、白いエプロンを身につけて料理するのは美術アカデミーだった。当時のサロンは、いつも同じ、脂肪分の多いがつつりした料理だった。これらの古典的な料理、柔らかく丸められた濃厚な肉団子は、あなたをゆつくりと、そして確実に窒息させる代物であり、それを呑み込むには、どれほどの勇気が必要かを、人々はあらかじめ知っていた。年老いたアカデミーは、創設以来の女料理人¹⁵であり、独自のレシピを持っていて、決してそこから離れようとしなかった。彼女は、気質や時代がどのように変わろうとも、うまく立ち回って、公衆に同じ料理をふるまった。善良な公衆は、喉を詰まらせそうになって、ついに不平を言うようになった。彼らは勘弁してほしいと頼んで、もつとス

パイスのきいた、軽くて、見た目も味もつと食欲をそそるような料理を出してほしいと言ったのである。

この年老いたアカデミーの女料理人の嘆きを思い起こしてほしい。人々は彼女から、二、三代目にわたって芸術家たちをソテーした鍋を取り上げたのだ。人々は彼女を嘆くがままにして、フライパンの柄を、他のへば料理人どもに預けたのだ。

ここで、私たちが自由と正義に関して持っている実際的な感覚が炸裂した。芸術家たちはアカデミーの党派主義に不平を言い、彼らが自分たちで審査委員会を選出することが決定された。そうすれば、彼らが厳しくて個性的な審査員たちを選んでも、もはや憤慨する必要はないだろう。それが決定であった。

しかし、読者諸氏はおそらく、すべての画家とすべての彫刻家、すべての版画家とすべての建築家に投票が呼びかけられたとお考えのことだろう。皆さんがこの国を盲目的に愛していることがよくわかる。ああ！嘆かわしいことに、真実は悲しい。実際白状しなければならぬのだが、審査委員会を任命するのは、まさしく審査委員会を必要としない人々なのである。皆さんや私が、ポケットの中に一つか二つのメダルを持っていれば、私たちは誰かを選出することができ、私たちには選出する人が誰であろうとほとんど関心がない。というのも、私たちの作品は前もって入選が決まっているので、その人は私たちの絵を見る権利を持っていないからだ。しかし、五年か六年の間連続してサロンから閉め出された哀れな画家は、審査員を選ぶ許可さえ与えられず、私たちが無関心に、あるいは仲間内の馴れ合いで押しつけた審査員を甘受しなければならないのである。

私はこの点を強調したい。審査委員会は普通選挙によって選出されるのではなく、いくつかの褒賞を受けてすでにあらゆる審査を免除された芸術家たちだけが参加する制限選挙によって任命されるのである。示すべきメダルを持たない芸術家たちに、どのような保証があるだろうか。なんということだ！若い芸術家たちの作品を審査して受け入

れる責任を持つ審査委員会を作ったというのに、もはや審査を受ける必要のない芸術家たちに、その審査委員会を任命させるとは！ 投票に呼ぶべきなのは、まだ無名の人々、隠れた勤労者たちであり、彼らが自分たちを理解してくれ、群衆の目に触れることを許可してくれる法廷を作れるようにすることが必要なのだ。

断言してもよいが、投票の歴史というのは、つねに悲惨な歴史である。ここでは、芸術には何のなすすべもない。人間の悲惨と愚かさが露わになる場所なのだ。何が起こるか、そして毎年どういうことになるかは、すでにおわかりだろう。成功するのは、あるときはこの人物の派閥、またあるときは別の人物の派閥ということになるだろう。私たちにほもはやアカデミーのような安定した団体はないのだ。あるのはただ、いかようにも結集することのできる数多くの芸術家たちであり、彼らはきわめて敵対的で情け容赦のない見解を持つ、冷酷な法廷を形成することができるのだ。

ある年のサロンは、すっかり緑色だろう。また別の年には、すっかり青に染まるだろう。そして三年後にはおそらく薔薇色に染まるかもしれない。公衆は、厨房にはいつて調理に立ち会っているわけではないので、これらさまざまなサロンを、芸術の現在の正確な表現として受け入れるだろう。彼らには、その展覧会全体を作ったのがただ一人の画家であるということがわからないだろう。彼らは真面目に展覧会へ行つて、その年の芸術全体を詰め込むのだと思つて口いっぱいにほおばることだろう。

物事をその現実の中で力強く立て直す必要がある。けちくさい個人的な考えを擁護するために産業宮¹⁶へ行くこともあるこれらの審査員たちに、展覧会というものは、真面目な勤労者たちに広く自身の作品を公開する機会を与えるために作られたものだということを言わなければならない。すべての納税者が税金を払っているのだから、派閥やシステムの問題で、ある人々には門戸を開き、別の人々にそれを閉ざすといったことをするべきではない。

これらの審査員たちが自分たちの仕事をどのように理解しているのか、私にはわからない。まったくのところ、彼らは真実と正義を馬鹿にしているのだ。私にとって、サロンとは芸術の動向の確認以外のものではあり得ない。フランス中の人々が、白く見る人も黒く見る人も、自分たちの作品を送って公衆にこう言うのだ。「これが私たちの現状です。精神は前へと歩み、私たちも歩んでいます。この一年間に私たちが獲得したと思う真実がここにあります。」ところが、芸術家と公衆の間に置かれた人々がいて、彼らは、その絶大な権力によって、真実の三分の一か四分の一しか見せない。彼らは芸術を切斷し、群衆には毀損された死体しか見せないのである。

彼らにわかつてほしいことは、自分たちがそこにいるのは凡庸な作品や無能な作品を拒否するためではないということである。彼らには、生き生きとした個性的な作品に触れることが禁じられている。もし拒絶したいなら拒絶すればよい、そもそもそれが彼らの仕事なのだから。寄宿生の裸体画習作や、非嫡出の師匠のさらに退化した弟子たちを拒絶すればよいのだ。しかし、お願いだから、自由な芸術家たち、戸外で生活し、自然の苦く強烈な現実を他の場所へ、もっと遠くへ探しにいく人々を、敬意を持って受け入れてほしい。

今年の審査委員会の選挙がどのように行われたかご存じだろうか。聞くところによれば、ある画家たちのグループがリストを作成し、それを印刷して投票権を持つ芸術家たちのアトリエに配布したということだ。そのリストがそっくりそのまま通ったのである。

お尋ねしたいのだが、これら個人的な利害の中で、芸術の利害はどこにあるのだろうか。若い勤労者たちに、どのような保証を与えただろうか。すべてを彼らのためにおこなったふりをして、彼らが不満を抱けば、実に気難しい連中だと言いつつのだ。これは冗談ではないだろうか。しかし問題は深刻で、今や態度を鮮明にする時期が来ている。私は、アカデミーの年老いた女料理人をふたたび雇った方がましだと思う。彼女なら驚かされることはないだろう。

彼女なら憎悪も友情もつねに変わらない。今や、これらの仲間付き合いで選出された審査員たちが相手だと、もはやどの聖人を信仰すればいいのかもわからない。もし私がお金に困っている画家なら、その趣味に合わせて絵を描くために、いったい誰が審査員になるのかを予測することが大きな気がかりの種となるだろう。

中でも今回拒絶されたのは、ここ数年作品を受け入れられていたマネ氏とブリゴ氏¹⁷である。明らかに、この画家たちは入選する価値が大幅に低下したというわけではあり得ないし、彼らの最新作は以前のものよりむしろ優れてさえいることを私は知っている。それでは、この拒絶をどのように説明できるのだろうか。

もしある画家が今日、作品を公衆に見せるにふさわしいと判断されたなら、理性的に考えて、翌日になってその作品に覆いを掛けて隠すことはできないと思われる。しかしながら、審査委員会が犯したのは、まさにこの大失策なのである。なぜだろうか。説明しよう。

互いに他を蹴落とそうとする芸術家同士のこの内戦を想像できるだろうか。今日の強者は昨日の強者を追い払うだろう。それは野心と憎悪の恐るべき大混乱であり、スッラとマリウスの時代の一種の小ローマ¹⁸である。そして、良き公衆である私たちは、すべての芸術家の作品を見る権利を有しているのに、勝利者側の作品しか決して見ることはできないだろう。ああ、真理や正義はどこへ行つたのか！

アカデミーは決して、こんなふうに前言を翻したことはなかった。それは人々を何年間も外に追いやったが、一旦受け入れた後でふたたび追い出すようなことはしなかった。

神よ、私にあまりに強くアカデミーを思い起こさせないでほしい。悪は最悪よりもまだましだというだけだ。

私は審査員を選んで、何人かの芸術家を公平な陪審員であるべき人物として指名することも望まない。マネ氏とブリゴ氏は、おそらくブルトン氏¹⁹とブリオン氏²⁰を拒絶するだろうし、逆も同様だろう。人間には共感を抱く人と反

感を抱く人がいて、それを克服することはできない。しかしここで問題なのは、真理と正義である。

したがって、どんなものでもいいから、審査委員会をひとつ作るがよい。それが間違いを犯せば犯すほど、ソースの味は悪くなり、私はますます笑うだろう。この人々が私にとって愉快な見世物にならないとでもお考えだろうか。手練手管を駆使して、自分たちの小さな礼拝堂を守っている坊主連中の様子は、私をたいそう面白がらせる。しかし、落選者展と呼ばれたものを再開してもらいたいものだ²⁾。私はすべての同業者たちに、私のところに集まってほしいと願う。私は自分の声を大きくして、あの展示室の再開を勝ちとるためにあらゆる力を得たい。公衆がそこへ行つて、今度は彼らが、審査員と落選者たちの双方について裁きを下さだろう。今のところ、それが皆を満足させる唯一の方法である。落選した芸術家たちは、まだ作品を引き取っていない。急いで釘を打って、彼らの作品をどこかに掛けようではないか。

審査委員会（続き）

一八六六年四月三十日

私はあらゆる方面から、説明するよう催促されている。審査委員会に拒絶された優れた画家たちの名前を挙げるようにと強く求められているのだ。

公衆はしたがって、つねに良き公衆であるだろう。サロンに落選した画家たちは、まだこれから有名になる画家たちなので、読者諸氏の知らない名前しか挙げることはできない。私が嘆いているのはまさに、同業の画家たちとは同

じように考えないという唯一の理由で、真剣な若い画家たちを何年もの間、無名のままにしておくことを宣告する、あの不可解な審査なのである。ドラクロワをはじめとするあらゆる個性は、ある種の派閥主義の決定によつて長い間隠されてきたということを考えなければならぬ。私はこうしたことがふたたび起こらないことを願ひ、必ずや明日の巨匠となるであろう芸術家たちが、今日迫害されることのないよう要求するために、これらの記事を書いているのである。

私は、今年の審査委員会は、ある偏見に基づいて審査したということをはつきりと断言する。現代におけるフランス芸術のひとつの側面全体が、私たちに意図的に隠されたのである。私が前の記事でマネ氏とブリゴ氏の名前を出したのは、彼らはすでに知られているからである。同じ芸術潮流に属している画家たちの名前を二十人ばかり挙げることはできる。要するに審査委員会は、力強く生き生きとした絵画、生と現実のただ中で制作された習作を望まなかったのである。

笑っている連中は私の味方はしないだろうということはわかっている。フランス人は笑うことが大好きだ。そして私は、近いうちに他の人々よりもっと大きな声で笑うことになるだろうと誓つてもいい。最後に笑うものが勝つのだ。

そうとも！ 私は現実の擁護者になる。私はマネ氏を賛美するつもりだと平然と告白しよう。カバネル氏の白粉を軽蔑し、本物の自然の、苦く健全な香りの方を好むと宣言しよう。もちろん、私の判断のひとつひとは、その時が来たら披露するつもりだ。今回の記事では、レアリスムという名前と呼ばれた潮流は、サロンには姿を見せないだろうということを確認するにとどめたい。誰もこの点で私に反論することはできないだろう。

もちろんクールベの作品が展示されるであろうことは知っている。しかしクールベは敵方に寝返ってしまったよう

だ。誰かが彼のところに使いとして送られたらしい。というのも、オルナンの巨匠は恐ろしく騒ぎ立てる人なので、彼が気分を害するのを恐れたのだ。そして、もし彼が弟子たちを否認してくれるなら、称号や栄誉を与えようと申し出たのだろう。最優秀賞のメダルや勲章すらも提示されたという噂だ。その翌日、クールベは彼の弟子のブリゴ氏のところへ行つて、「おまえには、私の絵の哲学がない」と厳しく言い渡した。クールベの絵の哲学！ ああ、可哀想な師匠よ、ブルードンの本はあなたに民主主義の消化不良をもたらしたのですね。お願いですから、当代随一の画家でいて下さい。モラリストにも社会主義者にもならないで下さい²²。

そもそも、今の状況では、私の好感などはどうでもいいことだ！ 公衆である私は、言論の自由が侵害されたことを嘆く。公衆である私は、芸術の現在をその全体において与えられないことに怒りを覚える。公衆である私は、私に何も隠さないように要求する²³。私は、同業者の画家たちの一つのグループをそっくり、偏見を持ってサロンから追い出した芸術家たちに対して、正當かつ合法的に訴訟を起こす。

何らかの決定をするべく任命された人々の集まりというのは、どのようなものであれ、ある一定方向にしか回らず、ただ一つのバネにしか従わないような単純な機械ではない。それぞれの動き、それぞれの歯車の回転を説明するためには細心の研究をする必要がある。一般人は単に得られた結果しか見ない。それに対して観察者は、機械を揺さぶっている軋轢や突発的な動きに気づく。

『訳者註』一八七九年の版（シャルパンティエ版）では、テキストはここで中断されている。以下、小さな活字で訳出するのは、当初『ヴェヌスマン』紙に掲載されていた削除部分である。』

私は、審査委員会を部品ごとに分解し、そのメカニズムを説明して、そのバネの仕組みをよくわかってもらえるようにしてみたい。すでに述べたように、サロンは審査委員会の作品である以上、この非人格的で多重の作者を、その各部分において知ることが必要である。

審査委員会は二十八人のメンバーから成っており、以下が投票順のリストである。メダルを受賞者の芸術家たちによって任命されたメンバーは、ジェローム、カバネル、ピルス、ビダ、メソニエ、グレル、フランセ、フロマンタン、コロ、ロベール・フルーリ、ブルトン、エベール、ドーザ、ブリオン、ドービニー、バリアス、デュビュフ、ボードリの各氏。追加メンバーに、イザベール・ドラジョレ、テオドル・ルソーの各氏。行政によって任命されたメンバーに、コティエ、テオフィル・ゴッティエ、ラカース、メゾン伯爵、レゼ、ポール・ド・サン・ヴィクトール、アルフレッド・アラゴの各氏である。

行政によって任命された人々は、訴訟からすぐに除外したい。これは単なる芸術上の争いであり、手に絵筆を持っていない人々は皆、無関係とすることに私は固執する²⁴。ただ、ポール・ド・サン・ヴィクトール氏と特にテオフィル・ゴッティエ氏には、その唯一の罪と言えは新しい道を探っていることである若い人々に対して、ひじょうに厳しかったことを指摘しておきたい。テオフィル・ゴッティエ氏は、彼が受け入れた絵画を祝して『モントゥール』紙でじつにきれいな花火を打ち上げているが、自身が赤いチョッキを来ていた一八三〇年のことを覚えていないのだろうか？ ああ、もはや赤いチョッキの時代ではないことはわかっている。私たちは裸で生き生きとした肉体の時代にいるのであり、自分の神々が立ち去っていくのを見る年老いた頑迷なロマン主義者が抱くあらゆる不安は理解できる。

機械に残っているのは二十一個の歯車である。以下は、これらの歯車のひとつひとつの描写とその作動方式の説明である。

ジェローム氏。ひじょうに狡猾で巧妙な審査員である。彼はこれから行われる嘆かわしい仕事を理解したのである。重罪裁判所開廷の前日にスペインへと逃げ出して、閉廷のちょうど一日後に戻ってきた。すべての審査員は、この賢明で慎重な行動を模倣すべきであったろう。そうすれば私たちは、少なくとも完全な展覧会を見ることができたであろう。

カバネル氏。栄誉に埋め尽くされた画家で、残っている力のすべてを自身の栄光を担うことに使っており、月桂冠がどれひとつとして地面に滑り落ちないようにつねに気遣っているの、意地悪になっている暇がない。彼はひじょうに穏やかで寛容だったとある人が私に保証してくれた。聞くところによると、彼は去年自分に授与した大きなメダルのせいで、もうすこしで窒息するところだったらしい。彼は、公衆の面前で消化不良を起こした大食漢のように、いまだにすっかり恥じ入っているということだ。

ピルス氏。カバネル氏ほど喉をつまらせてはおらず、自分が十分に頑健だと思っているので、他の人々を倒そうすることはない。ビダ氏。この素描家が選ばれたのはおそらく、素描家を審査するためだろう。というのも、彼は画家として成功したことはないからである。ビダ氏は原理原則を擁護する。

メソニエ氏。小さな人物たちを描くほど時間にかかることはないようだ。なぜなら、リリプット国「小人国」の公認画家、ごく微量の同毒療法の画家は、ほとんどすべての会議に欠席したからである。しかし、メソニエ氏はそこで始まる画家たちの審査には立ち会ったと聞いた。

グレルル氏。去年、審査員のリストの最後だったこの画家は、今年第六位に位置している。この投票には、ある風聞がある。

その風聞によれば、私がすでに話題にし、これからも話題にすることになる画家グループが、これほど威厳があり榮譽ある画家グレルル氏がリストの最後にいることを嘆いていた。

ある日、そのグループの一人が、彼に投票するすべての人々は同時にデュビュフ氏にも投票してくれるならば、グレルル氏に素晴らしい地位を授与させようと申し出た。そういうわけで、グレルル氏はリストの六番目となり、デュビュフ氏は初めて審査員会のメンバーになるという名誉を得たのである。繰り返すが、これは単なる風聞である。

そもそも、彼の弟子たちが今日、意地悪をしているのだが、師匠の方は優れた人間としてふるまった。ご存じのように、王様といふのは決してもっとも偉大な王党主義者ではないのだ。時評欄（クロニック）によれば、グレルル氏はおそらく、ダンビエール城でアングル氏が彼をひどい目に遭わせたことを思い出したのだろう。二人の画家は同じ部屋でフレスコ画を描くことになったのだが、アングル氏は作品に取りかかるためにやって来たとき、グレルル氏がすでに制作した二枚のフレスコ画を見て、このような絵の隣で仕事することはできないと宣言して塗りつぶすように要求したらしい。

フランセ氏。彼は自分がレアリストか、それともイデアリストなのか、自分でもよく分かっていない。彼は聖なる森も描くし、ムードン^①の森も描く。確かな筋によれば、彼のデビュー作は、かなり広汎に理解され、ある種の力強さで描かれた風景画であったといふことだ。私の知っている彼の作品といえ、大量の水で洗われた水彩画のようなものだけである。彼は力強い気質の持ち主に対してかなり手厳しかったに違いない。

フロマンタン氏。ビダ氏の親友。彼はアフリカに行ったことがあり、置き時計にふさわしい魅力的な主題を持ち帰った。彼のペドウィン人たち「主に中東の砂漠に住むアラブ系遊牧民」は、食器用の皿の絵の模様に適した人々だ。これらの甘美な画家たち、

詩を理解し、昼食や夕食に夢や夢想を食べる画家たちはすべて、自然を思い起こさせる画布を見ると聖なる恐怖を抱く。彼らは自分たちにとって自然はあまりに汚すぎると言明したのである。

コロー氏。偉大な才能を持った画家。彼については後に私の考えを述べるつもりだ。彼は自身が共感を覚えたはずの作品の擁護において弱腰だった。審査委員会における彼の態度を説明するために、あるエピソードを援用することしよう。去年、メダルの授与があった。何人かの審査員がナゾン氏の一枚の風景画の前で恍惚となり、コロー氏の票を勝ち取ろうと奮闘した。ついにコロー氏は疲れ果てて、こう言ったのだ。「私は好い人間だ。彼にメダルをあげるがいい。しかし白状するが、このタブローは私にはさっぱり理解できないがね。」

ロベール＝フルーリ氏。ロマン主義の残党。自身のワインの中に水を混ぜることで、受け入れてもらうことができた。いかなる新しい動きにも、きわめて敵対的である。彼は今年のサロンで審査に従事していたが、一ヶ月前から彼の職はローマにあった。シュネツツ氏の後任として、ローマ・フランス学院の院長に任命されたのだ。ジェローム氏は、口実もなしに逃げ出したのに対して、ロベール＝フルーリ氏は口実があったのに残ったというわけだ！ まったくのところ、自身の義務を敢然と果たす人々がいるのだ。聞くところによると、ロベール＝フルーリ氏の子息が今年出品しており、おそらく四十個のメダルのうちのひとつを授与されるだろうということである。

ブルトン氏。この人は若くて戦闘的な画家である。彼はマネ氏の絵画の前でこんなふうにかんがふに叫んだそうだ。「もし我々がこれを受け入れれば、我々はもうおしまいだ。」「我々」とは一体誰のことだろうか？・・・ブルトン氏の描く農婦たちは、『レリア』²⁵を読んだことがあり、夜には月を眺めながら詩を作るまでに理想化されている。世界中いたるところで、彼の人物たちの気高さが話題になっている。したがって、彼はサロンには本物の農民を一人たりとも入れないことに固執しているのだ。今年、彼は入り口を守護し、大地の力強い匂いを発しているものすべてを情け容赦もなく追い払った。

エベール氏。病気で熱を帯びた芸術家。健全な現実と仲良く暮らすには、あまりに病的な優雅さを持っている。

ドーザ氏。創設当初からの審査員。しかしながら、彼の経歴はあまり多くもないし輝かしくもない。彼は他の人々と一緒に投票した。それが私の知っているすべてである。

ブリオン氏。ブルトン氏の相棒。彼らは二人して、キャンペーンをおこなった。最近知られるようになったばかりのまだ若い勤労者たちが、別の道で成功を探っている人々の鼻先で、びしやりと扉を閉めるのを見るのは、悲しいことではないか。ブリオン氏は、

ある人物の前で、みずからそのことを告白したのだが、もし必要ならその人物の名前を挙げてもいい。審査委員会の態度が話題になったとき、彼は「そうだ、少しは偏見があった」と言った。このような申告を前にすれば、みずからの不公平性を自白している法廷の判決を破棄するべきではないだろうか。

ドービーニー氏。彼のことはいくら称賛してもしすぎることはない。彼は芸術家として、また心ある人間としてふるまった。真理と正義のために同僚の何人かと戦ったのは彼だけだった。

彼は言った。「無能な連中と凡庸な連中だけを拒絶しよう。気質の持ち主、探求し仕事をしている人々はすべて入選させよう。」素晴らしい言葉だ。芸術家を審判するこの芸術家の法廷の、唯一の法則であるべき言葉だ。

ドービーニー氏の努力は無に帰せられ、投票のたびごとに打ち負かされた。二度か三度、同僚たちの信じがたい決定を前にして、彼は辞職を申し出たほどだ。

ひとつの行為が、この好感の持てる人物の肖像を完成させるだろう。

彼の息子と娘が、一人は風景画を、もう一人は花の絵をサロンに送っていたため、彼は審査委員会がこれらのタブローの当落を決める間、席を外していたのである。

バリアス氏。素晴らしい人物。彼は他の人々と投票をともしにするだけにしておいた。

デュビュフ氏。先ほど話した伝説によれば、彼はグレル氏が六番目に任命されたために、十七番目に席を得た。紅おしろいと白チョークで肖像画を描くデュビュフ氏は、ブルトン氏およびブリオン氏と同調した。彼はマネ氏の《笛吹き少年》の前で気絶しそうになり、こんな脅しの暴言を吐いた。「私が審査委員会に属している限り、このような絵画は入選させない。」

ボードリ氏。この画家は自身の最近の不成功にひじょうにいらだっている。他人の成功のために彼を働かせようとするのはじつに奇妙な考えだ。

イザベール氏。現代に迷い込んだロマン主義者。彼は当然ながら、自分の神々に忠実なままであり、すべての新しい神々には石を投げるのが自身の義務と心得ている。

ド・ラジヨレ氏。ド・ラジヨレ氏とは誰か？ ド・ラジヨレ氏と何者か？ 皆さんも疑問に思われるだろう。私もそうだったように。皆さんが答えを探そうとしても何も見つからないだろう。それで私は皆さんのために探求の労をとった。審査員の中でもっとも無名の人物に、もっとも大きなスペースを割くことをお許し願いたい。これは興味深いケースで、まったくそれだけの価値に値する

のである。

ド・ラジョレ氏とは、——というのもド・ラジョレ氏が存在するからなのだが——、グレル氏の弟子で、芸術上の業績としては一八六四年のサロンに展示された風景画一点と、一八六五年に展示されたもう一点の風景画があるだけだ。彼はその上に、ロワイヤル広場の回顧展を組織した。これが彼の肩書きである。しかし、私はもつとも大事なことを忘れていた。グレル氏とデュビュフ氏をセットにした選挙運動は、どうも彼によるものらしい。

彼はこうにして巧妙な手つきで同僚たちの投票を分配したために、それらのいくつかが彼の手の中に残ったのである。彼はどさくさに紛れて任命された。

一八六三年にはド・ラジョレ氏の絵画はアカデミーによって落選させられた。アカデミー会員であるカバネル氏やロペール＝フルーリ氏やメソニエ氏は、以前にサロンに展示されるにふさわしくないと判断した若造を自分たちの同僚として持つことをどう思っているのだろうか？

おそらく皆さんは、私と同様、どんな方法によって、またどんな理由から任命されたのかもわからないこの無名の審査員は、寛大である責を持っていると思われるだろう。ところが、ド・ラジョレ氏は、自身の票を三〇〇点の作品にしか与えなかったと証人たちの前で自慢したのである。サロンには約四〇〇〇点の作品があるというのである。

自分の仲間たちをすべて門前払いするこの昨日の落選者の役割がお分かりだろうか？

私に残されているのは、ニューヴェルケルク伯爵が、本紙に掲載する榮譽を与えられた手紙の一文を思い起こしていただくことだけだ。「審査委員会は、フランスがそれを誇る権利を持つ才能ある人々の集まりである。」失礼ですが、伯爵、ド・ラジョレ氏は、私がそれを誇る権利を持つ才能ある人々のひとりでしょうか？ 誓ってもよいが、私はこの場合、決してこの権利を濫用することはないだろう。

テオドール・ルソー氏。凝り固まったロマン主義者。彼は十年間落選を続けた。彼は厳しさには厳しさでもって報いるのだ。彼はレアリストたちに対してもつとも過酷だった一人だと聞いた。彼はその遠縁にあたるというのである。

さて、以上が皆さんの面前で解体した機械である。それぞれの歯車のことを知って、ここで私がすることができたよりも、もっと自由にそれらを研究することもできるだろう。

お望みなら、機械をふたたび組み立て直して、少し動かしてみよう。歯車を、大きなものも小さなものも、左に回転しているものも右に回転しているものも、細心に取り扱おう。それらを組み立てて、出来映えを見てみよう。機械は時々軋み、いくつかの部品は自分勝手に動くようにする。しかし、結局のところ、全体は適切に稼働する。もしすべての歯車が回転しなければ、同じバネによって押されて、それらは互いにかみ合い、共同して同じ仕事に精を出すようになる。

何の関心もなしに落選させたり入選させたりする脳天気な連中がいる。戦いの外に身を置いている成功者たちがいる。自分たちの信条に固執して、どのような新しい試みをも拒否する過去の芸術家たちがいる。そして最後に、ちょっとした作風がちよつとした成功をもたらしただために、その成功を歯の間に啞えて、近づこうとする同業者には誰にももうなり声を上げて威嚇する現在の芸術家たちがいる。

こうして得られた結果を読者諸氏はご存じだ。それこそが、私たちが一緒に見学することになる空虚で陰鬱なサロンの部屋部屋である。私が審査委員会にわが国の芸術の貧しさの罪を着せることはできないことはわかっている。しかし私は、審査委員会によって勇気をくじかれてしまうすべての大胆な芸術家たちについて釈明を求めることもできないのだ。

凡庸な作品が入選する。壁を覆うのは、穏当で何の価値もない作品だ。上下左右を見渡してみても、衝撃を与えるタブロー、人を惹きつけるタブローは一枚もない。芸術は顔の汚れを落としてもらい、髪の毛を丁寧になでつけてもらった。それはスリッパを履いて白いワイシャツを着た律儀なブルジョワである。

知らない名前の署名されたこれらの穏当な作品に、無審査で入選したタブローを付け加えれば、これから私が研究し議論すべき画家たちの作品となる。

これが、いつも変わらないサロンというものである。

今年、審査委員会はさらに厳しい清潔さを必要とした。昨年、理想の箒は床の上に落ちたいくつかの藁くずの掃除を忘れていたことに気づいたのである。委員会は不要物を捨てようとして、レアリストたちを追い出した。彼らは手を洗っていないと非難されたのである。美しいご婦人方は正装してサロンを見学するだろう。そこではすべてが鏡のように清潔で明澄であるべきだ。絵の前で髪を結うこともできるだろう。

さて、私は陪審員たちに、彼らは悪い税関吏だと述べて、この記事を締めくくるのは嬉しい。敵は要塞の中に入っていると私は彼らに警告する。私が言っているのは、彼らがうっかり入選させたいいくつかの良作のことではない。私が言いたいのはただ、ブリゴ氏にはいちばん用心したにもかかわらず、サロンには彼の二点の習作が展示されるだろうということだ。よく探してみてほしい。それらは別の名前で署名されているが、Bの頭文字のグループの中にある。したがって、若い芸術家諸君、もし来年入選したければ、ブリゴではなく、バルバンシューという偽名を用いたまえ。きっと全員一致で入選するだろう。明らかに、それは単なる名前だけの問題であるようだから。

芸術の現在

一八六六年五月四日

私はおそらく、ほんのわずかな判断をも下す前に、芸術における私の見方はどのようなものか、私の美学はいかなるものかをはっきりと説明するべきだっただろう。私がこれまで、行きがかり上、表明せざるを得なかった意見の端々

は、一般通念を傷つけるものであったこと、そして、何の根拠もないように見えるこれらの率直な断言のために、私が恨みを買っていることはわかっている。

私にも他の人と同様、ちよつとした理論があり、また他の人と同様に、自分の理論が唯一正しいものだと思っている。読者にとっては面白くないことを覚悟で²⁷、この理論を述べることにしよう。私の愛するものと憎むもの²⁸は、そこからごく自然に導き出されるだろう。

公衆にとって、——私はここで、この公衆という言葉が悪い意味には取っていない——、公衆にとって、一個の芸術作品、一枚のタブローというのは心地よい感覚を与えるもので、甘美な、また恐ろしいやり方で心を動かしてくれるものである。それは大量虐殺であつたり、愛らしい乙女であつたりする。つまり、息も絶え絶えの犠牲者たちが、彼らを威嚇する銃の下で呻き、身を引きずっていたり、雪のように真つ白な乙女が、柱に寄りかかつて月明かりのもとで夢想していたりする。私が言いたいのは、大衆が絵画の中に見ているのは主題、喉元を締め付けられたり心臓を驚ぶかみにされたりする主題であり、画家に対して涙か微笑以外のものを求めているという事である。

反対に、私にとって——多くの人にとってもそうであることを願うのだが——、ひとつの芸術作品とはひとつの人格、ひとつの個性である。

私が芸術家に求めるものは、琴線に触れる光景やぞつとするような悪夢を見せてくれることではない。自分自身を、心も肉体もそっくりさらけ出してくれることだ。力強く個性的な精神をはつきりと示すこと、自然をみずからの手の中に大きくつかみ取り、それを目に見えるがままに、私たちの前にそっくりと植え付けるような一個の本性をはつきりと示してくれることだ。要するに、私は小手先の器用さ、欲得ずくのおべんちゃら、勉強して学んだものの、熱心な仕事によって慣れ親しんだもの、誰がしの歴史的な芝居もどき、別の誰がしの香気に満ちた夢想といったものすべて

を、心底から軽蔑する。反対に、私は個性的な作品、力強く独特の手によって一氣呵成に生み出される作品に心からの賛辞を贈る。

したがってここで問題になるのは、氣に入られるとか氣に入れないとかいうことではなく、自分自身であること、自分の心を赤裸に示してみせること、一つの個性を力強く表明することである。

私はいかなる流派にも与しない。なぜなら私は人間の真実に味方するのであり、人間の真実はいかなる徒党をも、いかなる体系をも排除するからである。「芸術 *Art*」という言葉は私は好まない。この言葉には、必要な体裁の整備や絶対的な理想といった、何かよく分からない考えが含まれている。芸術を作るとは、人間と自然の外に何かを作ることではないだろうか。私が望むのは、生命を作ることだ。生きていること、自分自身の目と氣質にしたがつて、あらゆるものの外に、新たに創造することである。私が一枚のタブローの中に求めるものは、一人の人間であつてタブローではない。

私の考えでは、ひとつの作品の中には二つの要素がある。現実の要素すなわち自然と、個人的な要素すなわち人間である。

現実の要素である自然は一定であり、つねに同じである。それは誰にとつても等しいままである。もしも共通の尺度というものがあり得るとすれば、自然は生産されるすべての作品にとつての共通の尺度となり得るだろう。

反対に、個人的な要素である人間は、無限に変化する。作品の数だけ異なる精神が存在する。もし氣質というものが存在しなければ、すべてのタブローは必然的に単なる写真²⁹となつてしまうだろう。

したがって、一個の芸術作品とは、変化する要素である人間と固定した要素である自然の組み合わせでしかない。「レアリスト」という言葉は、現実を氣質に従わせることを主張する私にとっては何の意味もない言葉だ。真実らしく制

作すれば³⁰、私は拍手する。しかし、とりわけ個人的で生き生きと制作すれば、私はもっと強く拍手する。もし、この理論から外れるならば、過去を否定せざるを得なくなり、毎年定義を作り直して広げていかなければならぬだろう。

なぜなら、芸術の美において、絶対的で永遠の真実があると信じるのは、もうひとつのたちの悪い冗談だからである。一にして完璧なる真実というものは、毎朝、その日の夜に用いる一個の真実を作っている私たち向きではない。あらゆるものと同様、芸術というものは人間の生産物、人間の分泌物である。私たちの作品の美を分泌しているのは私たちの身体である。私たちの身体は気候や風俗によって変化するので、分泌物も同様に変化する。

つまり、明日の作品は今日の作品ではあり得ないだろう。いかなる規則も作ることとはできないし、いかなる掟を定めることもできない。自分の本性に果敢に身を任せて、自分を欺こうとはしないことだ。自分の言葉を話すのを恐れて、死語を苦勞してたとどしく読もうとしているのではないか？

私が強く望むのは、次のようなことだ。私は、教師によって与えられた手本にしたがって作られた生徒の作品は望まない。そのような作品は、私が子供の時、目の前に広げられた石版刷りのページをお手本に字を書いていた文字の練習帳を思い出させる。私は過去への回帰も、復活と称されるものもごめんだ。あらゆる時代から理想の断片をかき集めて作られたひとつの理想³¹にしたがって描かれたようなタブローはごめんだ。私は生命、気質、現実でないものは一切ごめんだ！

さて今度は、どうか私のことを憐れんでいただきたい。私のような気質の持ち主が昨日、サロンのだだっ広くて陰鬱な、無能な作品の山に迷い込んで、どれほど苦しまねばならなかったかを考えてみてほしいのだ。正直に言って、あまりの厳しさを予見して、一時は仕事を放り出そうと思ったくらいだ。

しかし、私は芸術家たちの信念を非難しようとしているのではない。彼らの方が、私の信念をもっと激しく傷つけたのだ。読者の皆さんは、私の立場を理解して、「この可哀想な男は胸がむかむかしているのに、公衆に対する礼儀を保つために吐き気を押さえているのだ」と考えて下さるだろうか。

私はかつてこれほどの凡庸な作品の堆積を見たことはない。二千枚の絵があつたが、人間は十人もいなかった。これら二千枚の絵の中で、人間の言葉を話しているのは十二枚か十五枚くらいだ。他の絵は皆、香水屋の戯言を話しているだけだ。私は厭しすぎるだろうか。しかし、私は他の人たちがごく小声で考えていることを大声で言っているだけだ。

少なくとも私は、自分の時代を否定しない。私は現代を信じており、現代はみずから探求し労働していることを知っている。私たちは戦いと熱の時代に生きており、才能や天才を持っている人々もいる。しかし私は、凡庸な者と力のある者を混同したくはない。全員に一言ずつ賛辞を送り、それゆえ結局誰一人として讃美していないような、無関心な寛容さを持たない方がいいと思う。

私たちの時代は次のようなものだ。私たちは文明人で、家には婦人用居間や客間がある。お金のない人々には漆喰でよいが、金持ちの壁には絵画が必要だ。それで、石工によって始められた仕事を仕上げる職人たちの大きな同業組合が作られた。お分かりのように、たくさんのお画家が必要だ。画家を大量に育てなければならない。しかも、人々に気に入られ、時代の趣味を傷つけないように、彼らに最良の助言を与えるのだ。

これに、現代芸術の精神を付け加えてほしい。科学と産業の侵略に直面した芸術家たちは、その反動から、夢の中へ、金ラメと薄葉紙でできた安びか物の天国へと飛び込んだ。ルネサンスの巨匠たちは、私たちがその前で恍惚となっている愛すべき小綺麗な品々のことを考えていたかどうか、ちよつと見に行つてほしい。彼らは力強い本性の持ち主

であり、生のただ中で絵を描いていた。私たちはといえば、神経質で不安でいっぱいだ。私たちの中には女性的な部分が多くある。そして自分たちはあまりに弱々しく消耗していると感じているので、豊かな健康は氣に入らないのだ。感傷的な作品や甘ったるい作品こそ大歓迎なのだ！

わが国の芸術家たちは詩人である。これは、思考する責任すらない人々にとっては大いなる侮辱だろうが、私はそう思う。サロンを見てほしい。そこにあるのは、詩節や抒情短詩ばかりだ。ある者はポーランドへの頌歌を作り、また別の者はクレオパトラへの頌歌をこしらえる。ティブルス〔古代ローマの抒情詩人〕のような調子で歌う者もいれば、ルクレティウス〔古代ローマの哲学詩人〕のような大々的なトランペットを奏でようとする者もいる。戦争賛歌や悲歌、きわどい戯れ歌や寓話詩の数々があるのは言うまでもない。

何と騒がしいことだ。

皆さんは画家なのだから、どうか詩を歌うのではなく絵を描いてほしい。ここに肉体があり、光がある。あなたの創造物であるアダムを作ってほしい。あなた方は、人間を作る人であって影を作る人ではない。しかし、婦人用居間の中では丸裸の男性は礼儀を欠いているのは確かだ。だからあなた方は、少女たちの薔薇色の肌をした人形と同じくらい穏当で生気のない、大きくてグロテスクな操り人形を描くのだ。

才能のある人間は、別のやり方をしているのがお分かりだろう。サロンの注目すべきいくつかの作品を見てほしい。それらは壁に穴を開けている。それらはほとんど不快と言っているもので、隣人たちの穏やかな囁きの中で大きな叫び声を上げている。このような作品をあえて描く画家たちは、さきほど話題にした上品な塗装工たちの同業組合には属していない。彼らは少数派で、自分の力で生きており、いかなる流派にも属さない。

すでに述べたように、わが国の画家たちの凡庸さに関して、サロンの審査員団を非難することはできない。しかし、

彼らが厳しくあらねばならないと考えているなら、どうしてこのような愚かな作品の数々を私たちが見ずにすませるようにしてくれないのだろうか。もし才能ある画家しか認めないならば、三メートル四方の部屋で十分だろう。

何人かの気質ある画家たちがサロンに姿を見せていないことを残念に思う点で、私はそれほど革新的だっただろうか。現代においては、姿を現した個性を拒絶するほど、個性があふれているわけではないのだ。もっとも、気質というものは、たった一度の拒絶で死んだりしないことはわかっている。私は彼らの立場を擁護する。それが正当だと思うからだ。しかし、心の底では、才能というものの健康状態について、私は安心している。父親たちの世代はクールベを笑い者にしたが、私たちは彼の絵の前で恍惚となっている。私たちの世代はマネを笑い者にするが、息子たちの世代は彼の絵の前で恍惚となるだろう。

【註】

1 本稿は、一八六六年に発表されたエミール・ゾラ（一八四〇—一九〇二）の最初のサロン評『わがサロン』*Mon Salon*の全文翻訳のうち、前半に相当する部分である。翻訳の底本には、*Emile Zola, Mon Salon [1866], in Ecrits sur l'art, édition établie, présentée et annotée par Jean-Pierre Leduc-Adine, Gallimard, 1991, pp.85-135*を用いた（以下の註におこづ「ガリマール版」と呼ぶ）。

このサロン評は、最初、一八六六年四月二十七日から五月二十日の間に、七回にわたって『エヴェヌマン』紙に連載されたが、それに先だって、四月十九日には「ある自殺」と題された編集長ヴィルメッサン宛ての手紙によって連載の予告が行われ、さらに四月二十四日には「ある自殺」の記事に署名した「クロード」とはゾラ自身に他ならないことを明らかにする短信が掲載されている。ゾラのサロン評には新聞購読者などからの抗議の手紙が殺到し、編集長ヴィルメッサンの判断により、連載は七回で打ち切られた。ゾラは、これら七回の記事に、「わが友ポール・セザンヌへ」という序文を付け、巻末には付録として読者か

らの非難の手紙三通と、擁護の手紙三通をつけて、一八六六年七月、小冊子の単行本として刊行した (Emile Zola, *Mon Salon*, augmenté d'une préface et d'un appendice, Paris, Librairie Centrale (24, boulevard des Italiens), 1866)。この単行本を以下の註において「初版本」と呼ぶ。初版本には「ある自殺」とそれに続く短信は収録されていない。また、連載第二回の「審査委員会（続き）」の記事において、個々の審査員を名指しで批評している箇所は削除されている。本稿では、底本としたガリマール版の編者ジャン・ピエール・ルデユック・アディヌに倣って、初出の『エヴェヌマン』紙にしか掲載されていない部分もやや小さな活字で訳出している。また、ガリマール版には収録されておらず、初版本にのみ付属している読者からの手紙も、後半部で訳出する予定である。

『わがサロン』はその後、一八七九年に、この読者からの手紙など一部を削除して、シャルパンティエ書店刊行による以下の書籍に収録された（註において「シャルパンティエ版」と呼ぶ）。Emile Zola, *Mes Haines, causeries littéraires et artistiques — Mon Salon* (1866) — *Edouard Manet, étude biographique et critique, nouvelle édition*, Paris, G. Charpentier, éditeur, 1879。ただし、一八六八年にも『わがサロン』のタイトルでサロン評を書いているので、それと区別するために、翻訳ではシャルパンティエ版にしたがって『わがサロン（一八六六年）』と年号を入れた。

2 註1で述べたように、この記事は『エヴェヌマン』紙の掲載のみで、初版本『わがサロン』やシャルパンティエ版には収録されていないが、これから初めてのサロン評を書くこととするゾラの戦闘的なマニフェストとして興味深いテクストである。

3 イポリット・ド・ヴィルメッサン (1810-1879)。十九世紀フランスのジャーナリズムを牽引した人物のひとりで、当時『エヴェヌマン』紙の編集長。ルーアンに生まれ、最初リボン商人や保険の調査員などの仕事をした後、一八三九年にパリに定住して、広告入りのモード、文学、演劇、音楽の週刊誌『ラ・シルフィッド』を創刊。その後、いくつかの短命の新聞雑誌を創刊した後、一八五四年に『フィガロ』を週刊新聞として復刊し、一八七五年に編集長の職をフランシス・マニヤールに譲るまでその中心となった。新聞に定期的な「欄」を作ったり、予約購読者を募るために景品をつけたりして販路の拡大を図った。

4 『エヴェヌマン』紙は、ヴィルメッサンが一八六五年十一月、『フィガロ』の姉妹紙として創刊したばかりの日刊の文芸新聞である。一八六六年十一月十五日をもって廃刊となり、『フィガロ』に吸収される。

5 ゾラは一八六六年の一月末に、約四年間、広告部の主任として仕事をしたアシェット書店を退職し、筆一本の生活に入った。彼は『エヴェヌマン』紙に自身を売り込み、同年の二月一日から同紙に「今日と明日の書物」と題した新刊本紹介コラムを担当

するようになっていた。五月に開幕する一八六六年のサロンは、前年のサロンに入選したマネの《オランピア》が大きなスキャンダルを引き起こしたこともあって、審査は厳しかった。《笛を吹く少年》と《悲劇俳優》の二点を応募したマネをはじめ、いわゆる「新しい絵画」を目指す画家たちの多くが落選したため、画家たちの不満は高まり、落選者展の開催を求める声も出ていた。

6 一八六六年のサロンの開幕は五月一日。「芸術の現在」と題された記事は、五月四日に掲載される。

7 四月十六日の『エヴェヌマン』紙に、ヤロス（ジュール）・ホルツァッペル (Jalos Jules) Holzhapfel, 1826-66) という画家が「彼のタブローの一枚が拒絶されたことに絶望して」ピストル自殺を図ったことが報道された。四月十八日の『アヴニール・ナシオナル』紙において、ジュール・クラルティは次のように書いた。「芸術界では、ある画家の自殺が大いに取りざたされている。[...] 何度も落選した後、審査委員会の最後の拒絶により、その不幸な男はついに我慢の限界を超えて、脳髓を撃ち抜いた。[...] ではなぜ、落選者展の開催を継続しないのか？」ゾラの記事が出るのはその翌日の十九日である。数日後には、ホルツァッペルはすでに四十歳で、これまで、一八五五年、五九年、六一年、六三年、六四年、六五年のサロンにはば連続して入選しており、審査委員会に対抗して彼の名前を出すのはやや無謀であることが判明するが、この時点ではゾラはまだそこまでの情報を得ていない。(Cf. Henri Mitterand, *Zola, Fayard, 3 vols.*, 1999, Tome I, *Sous le regard d'Olympia 1840-1871*, p.497)

8 原文は「* de larges taches rougeâtres」。ゾラはマネの絵画の特徴として「タッシュ（色斑、染み）」の用語を使用するが、この語がここですでに現れていることに注目したい。

9 ビエール＝シャルル・コント (Pierre-Charles Comte, 1823-1895) フランスの画家。リヨンの美術学校で学んだ後、パリに出てロベール＝フルーリのアトリエに入る。一八四八年から八七年までサロンに出品。特にヴァロワ朝を題材とした歴史画ならびに風俗画を描く。代表作に《一三六一年のイネス・ド・カストロの戴冠》(一八四九)、《アンリ三世とギーズ公》(一八五五) など。

10 「もし自分がホルツァッペルを落選させた審査委員会の委員だったら」の意。サロンの審査委員会は大部分が、後にゾラも書いているように、自身もサロンに出品する画家たちで構成されていた。

11 この手紙は「クロード」の名前で署名されているが、このペンネームは明白であった。ゾラの初めての長編小説『クロードの告白』は、一八六五年十一月に刊行されたばかりで、ある程度の成功を収めており、この小説に関して、公序良俗への違反のことで帝国検事による調査が始まりさえしていた。それは、ゾラがアシエット書店を退職した理由のひとつでもあったと考えられる。続く四月二十四日の短信で、彼は仮面を脱いで、それ以降はエミール・ゾラと署名する。

12 ギョーは、一八六六年二月一日から『エヴェヌマン』紙に「今日と明日の書物」Livres d'aujourd'hui et de demain という新刊紹介のコラムを連載していた。

13 註1で述べたように、初版本『わがサロン（一八六六）』は、このセザンヌ宛ての手紙の形式を取った序文から始まっている。

14 ポール・ボードリ（Paul Baudry, 1828-1886）、フランスの画家。第二帝政期を代表するアカデミズム画家のひとりで、神話画や歴史画を描く。ナポレオン三世からオペラ座（ガルニエ宮）の装飾を依頼され、十年間従事した。

15 「アカデミー」l'Académieは女性名詞であるため、「女料理人」となっている。

16 当時のサロンの会場となっていた建物。一八五五年のパリでの最初の万国博覧会のメイン会場として建設された。場所は、シャンゼリゼ大通りに沿って、ロン＝ポワンとコンコルド広場の間に位置しており、二〇ハメートルの長大なファサードを持っていた。一八九六年に、グラン・パレとプティ・パレの建設の際に取り壊された。

17 エルネスト・ブリゴ（Ernest Brigot, 1836-?）フランスの画家。最初グレルールのアトリエに入るが、その後クールベの弟子となる。ルキウス・コルネリウス・スッラ（Lucius Cornelius Sulla, 138 BC - 78 BC）、およびガイウス・マリウス（Gaius Marius, 157 BC - 86 BC）は、ともに共和制ローマ末期の軍人、政治家。貴族階級出身のスッラと平民出身のマリウスは、権力闘争を繰り返して、そのためローマは三度にわたる激しい内戦と粛正の舞台となり、多くの人材が失われた。

19 ジュール・ブルトン（Jules Breton, 1827-1906）、フランスの画家。写実主義的ではあるがやや理想化された農民画を描いて人気を博した。

20 ギュスターヴ・ブリオン（Gustave Brion, 1824-1877）、フランスの画家。とりわけアルザス地方の風俗画を描いた。一八四七年以降、毎年サロンに入選。

21 一八六三年と同様に「落選者展」の開催を求める声は、当時の画家たちから上がっていた。ゾラの友人のセザンヌは、四月十九日付で美術局総監ニユーヴェルケルク伯爵に手紙を書いて、自身の落選した二点について、「芸術上の同僚である審査員諸氏の不適正な判断を受け入れることはできない」こと、「私を評価する任務を自分には彼らに与えていない」こと、「自作を出品して広く公衆の判断に待ちたい」こと、「展覧会はずべての真摯な芸術家に開放されるべき」こと、したがって、「落選者展の再開を求める」ことを記している。これはゾラの主張とはほぼ同じであり、二人がこの問題について話し合ったことが推察される。

22 前年一八六五年に発表した美術評論「ブルードンとクールベ」においてゾラは、芸術に社会的・道徳的な有用性を求めるブルー

ドンを批判し、「芸術作品は独創性によつてのみ生きる」と主張して、クールベは彼自身であることによって偉大であると主張している。

23 この一節では、「公衆である私は」* moi, public *という言葉が三度にわたって使われる。ゾラ一流の反復の手法である。

24 一八六六年の初版本では、ここまで本文に掲載されている。

25 ゴーティエは、一八六一年のサロン評では、マネの《スペインの歌い手（ギタレロ）》を歓迎したが、副審査委員長を務めていた一八六五年のサロンでは「モニトゥール」紙に次のように書いている。* Nous arrivons avec quelque répugnance aux étranges tableaux de M.Manet [...]. Aux yeux de beaucoup, il suffirait de passer et de rire, c'est une erreur. M. Manet n'est pas peu de chose: il a une école, des admirateurs, des fanatiques, même. *

26 ジョルジュ・サンドの一八三三年初版の小説。女主人公のレリアは、恋人との肉体的な結びつきを拒否し、この世で人を愛することのできない絶望感に捉えられている。

27 原語は「* Au risque de n'être pas amusant *」。訳文では「読者にとっては」という言葉を補っている。ゾラは『レヴェヌメン』紙に寄稿する記事は「読者を楽しませるものであるべきだと考えていた。ヴィルメッサンは、ゾラに『今日と明日の書物』という新刊書についてのコラムを依頼するに当たって、「書物についての愉快なクロニク作者」le chroniqueur amusant de la bibliographie」であることを求め、それに失敗して読者の支持を得られなかった場合は、容赦なく解雇することを宣告していた。

28 原語は「* mes tendresses et mes haines *」。

29 原語は「* travailleurs *」。訳語を「勤労者」としたが、これは単に「仕事をする人」「働き手」の意味であって、「労働者」と区別するためである。

30 原語は「* Faites vrai *」。モーパッサンは「* faire vrai *」という表現について次のように書いていづ。* Faire vrai consiste à donner l'illusion complète du vrai suivant la logique ordinaire des faits, et non à le transcrire servilement dans le pêle-mêle de leur succession. J'en conclus que ces réalistes de talent devraient plutôt s'appeler illusionnistes. *

(<http://www.dicocitations.com/citations/citation-30870.php>)

31 第二帝政期にとりわけ流行した折衷主義(eclectisme)の美学を意味している。